結草
kusamusubi
publishing house:2-19-32Moriyama Kanazawa
Jodo Shinsyu Jhokoji phone 076-252-4922
www.jhokoji.net/ info@jhokoji.net 2012.11.11

# 「仏法聴聞」称名念仏すべきものなり

道因寺住職　相馬　豊

午後から雨が降り始めまして、足元のお悪い中、浄光寺さんの報恩講にお参りいただきまして有難うございます。今ほどもご紹介いただきました、白山市、旧松任の方にあります道因寺の住職をしております、相馬豊と申します。よろしくお願い致します。昨年もご縁をいただきましたが、今年もこうやって報恩講という場にご縁をいただきまして有難うございます。

## 仏法聴聞

蓮如上人は、非常に私たちに仏法を聞くということを大切にしてくださいということを言われました。また、私たち真宗のご門徒の方々が、一人ひとり亡くなっていくという現実の中で、よく先輩の方々からこういうお言葉をいただいております。「仏法聴聞」という言葉を。仏法とは聴聞に限りますよと。聞くことです。多くの真宗門徒の先輩の方々から「仏法は聴聞に限ります」という言葉をいただいております。

この仏法聴聞、私たちもそうやって長い長い間、聴聞をし続けてきておりますけれども、この聴聞ということが、どういうことなんだろうか、そのことをご一緒に訪ねていきたく思っております。

## 聴く

「聴聞」という中で、耳偏の「聴」、「きく」という言い方をします。これを国語辞典で調べてみましたら、こういう言葉使いになっております。「往きてきく」と。こういう言葉が国語辞典のほうに書かれておりました。往きてきくというのは、私たちでいいますと、コンサートでありますとか講演会、あるいは独演会など自分の趣味などききたいところに出向いてききます。自らが出向いてききますと。この聴聞の「聴」というのは、自らがその会場や場所に足を運んで行きますということです。今の私たちでいいますと、浄光寺さんのこの本堂に自ら足を運んで今ここに来ましたということです。

この「聴」ということだけでしたら、仏法でなくてもいいんです。先ほど言いましたように、自分の趣味あるはこの人のお話をききたいということですから、別に仏法でなくていいわけですよ。お医者さんの話であったり、評論家の話であったり、あるいはコンサートですから自分の好きな歌い手さんの歌をききに行っているわけです。あるいは落語家の落語をききに行く、そのときはこちらです「聴」です。ただし多くの先輩方が言われたのは、仏法は「聴聞」に限りますよと。

## 聞く

もう一つのここに「聞」という漢字があります。「聴」というのが「往きてきく」自らが足を運んできに来ましたと。それに対して「聞」というのは、どういうことかと申しますと、「来たりてきこゆ」この浄光寺の本堂に身を置いた時、日ごろのこころでは全く聞こえないものがここへ来たら聞こえてまいりましたということですね。ただ単に外側から聞こえてくるわけではないのです。ここに身を置いた時に日ごろのこころでは思いもよらないものが外側のものを縁として自分の中に呼び起こされましたというこ

とが「聞こえてまいりました」ということです。日ごろのこころとは全く違うようなものが、自分を呼び起こす響きとなってここに聞こえてまいりましたということです。

## 響きだされる

そうしますと、私たちがこの本堂に身を置いた時、まず何が最初に聞こえてきたか。一番最初に何が私に聞こえてきたのか。それは声です。最初に聞こえてまいりましたのは声です。どんな声が。お勤めの声がです。お勤めの声がまず聞こえてまいりました。その声にまず私たちは出遇っているわけです。その声は、例えば『正信偈』を一緒に唱和している声。正信偈を唱和する声は、私が声を出しているのですけれども、実はその声によって自分がまさに響きだされるわけです。私たちのほうはただ単に正信偈を読んでいるというふうに思っておりますけれども、実は読んでいることを通して自分が呼び出されているわけです。

まず、お勤めに出遇う。声に出遇いました。その声に出遇うとはどういうことかというと、今日まで声をずっと聞き続けてきた人の上に響いた言葉が、今私に声となっていただいているということです。単なる声ではないわけですよ。ずっとその声を通しながら聞いてきた人の声が言葉となって、今自分に響いてきている。自分にいただいておりますということです。

つまり私たちが、お勤めに出遇うということは、自分だけでなくて、そこにいろんな方々と出遇うということです。この本堂に一緒におられる方だけでなくて、同じようにこの本堂の中で声を出した今は亡き方々と出遇っていくということです。今の自分だけでなくて、既に亡くなった方の声を通しながら、時間と歴史をお勤めということを通していただいていくということです。自分の読んでいる正信偈の声は、同時にずっと聞き続けた方の言葉となったものを今いただいている。それが声というものです。だからこの声は、時間と歴史を持っているということです。それがまず私たちがここに出遇ってきた声です。私たちが一番最初に出遇うのは声なんです。その声を通しながら仏法を聴聞しているわけです。

## 称名念仏

だから出向いてきたから聞くのではなくて、出向いてみたらそこに日ごろのこころを覆す、翻す、言葉と声に今まさに出遇いましたということです。私たち一人ひとりが今まさにその声と出遇ったということです。その声とはどういう声か。称える声です。正信偈を称える、あるいは南無阿弥陀仏を称える声となって聞こえてまいります。

そのことを蓮如上人は、五帖目第一通の御文さんの中で「末代無知の在家止住の男女たらんともがらは」で始まりまして、終わりの方にいきますと「ねてもさめても、いのちのあらんかぎりは、称名念仏すべきものなり。あなかしこ、あなかしこ」（真宗聖典・八三二頁）と。ここにはっきりと蓮如上人は「称名念仏」という言葉をお使いになりました。この蓮如上人だけでなくて、親鸞聖人もやはり称名念仏。そして法然上人も同じように称名念仏。源信僧都も同じように。善導も。みな称名念仏なんですよ。

私たちも『御文』を読みますと何気なく「ねてもさめても、いのちのあらんかぎりは、称名念仏すべきものなり。あなかしこ、あなかしこ」と読んだり聞いたりしていますから、全くそこに何の疑問も持っておりません。そこに疑いであるとか疑問というものは持ちません。

## となえる

ところが、この称名念仏なんですけれども、「称」というは「となえる」です。だから蓮如上人の御文にいたしましても「ねてもさめても、いのちのあらんかぎり念仏を称えてください」とこう書いてあれば、そのまま受け止めればいいのですよ。ひらがな、またはカタカナで「となえる」と書いてあれば何も問題はないんですよ。ところがひらがな、カタカナではなくて漢字で書いてある。漢字で書いてあるということがひとつ大きな意味を持つのではないでしょうか。やはり国語辞典を調べてみます

と、「となえる」といった場合、もう一つ漢字があるんです。口偏の「となえる」＝「唱」。二つあるんですね。「となえる」といっても。口偏の「となえる」というのは、これは「一緒に声を揃えて正信偈を唱和いたしましょう」。あるいは学校の中でいいますと「クラス全員が一緒に童謡を唱和いたしましょう」。この時期でありますと「もみじ」であるとか、そういう童謡をクラスのみんなと一緒に声を揃えて唱和しましょうという「唱」です。

もうひとつこちらには意味があります。数をかぞえるという意味です。「なんまんだぶつ、なんまんだぶつ、なんまんだぶつ、なんまんだぶつ、なんまんだぶつ」と今私はお念仏を五回となえました。「唱」の場合、数をかぞえるという時に使われます。

そうすると具体的に親鸞聖人、蓮如上人、そして先の法然上人も「しょうみょう念仏」といった場合、必ず「称」なんですよ。そうすると「となえる」といっても漢字が二つあって、その二つの中でなぜ「称」を選びとったのでしょうかということです。

## ひとのいのち　みじかくもろし

親鸞聖人という方は、漢字一文字を非常に大切にされた方です。漢字の一文字というものに非常にこだわったのです。例えば「命」という漢字があります。私たちは、ただ「いのち」あるいは「メイ」というふうに読んでいます。しかし親鸞聖人という方は、この「命」という漢字を使う時には、大切なことがありますということを伝えてくれました。八十五歳の折りに『正像末和讃』というご和讃をつくられます。その中に『阿弥陀経』にでてくる「命濁」、命の濁りというものを冒頭にもってこられたご和讃をつくられました。そこにこういう言葉を横に添えられました。「ひとのいのちみじかく、もろし」と。

親鸞聖人にとって命とはどういうことなのか。生きてきたなかで、いろんな人の死に遇うてきて、その死というものを通して、老いた人、若い人、男性、女性、さまざまな人の死に遇うてきた時に、私にとって命とはこういういただきをしますと。「ひとのいのちみじかく、もろし」これが親鸞聖人の命の受け取り方です。

ご承知のように十三年間連続三万人以上の方が自らの命を絶っている。また昨年の十月には大津での中学生のいじめ問題が発端となって、各県の教育委員会で具体的にいじめの実態が調査されるようになりました。そうするとあらゆるいじめというものがどんどん見えるようになってきた。それと同時に多くの中学生、高校生がやはり命を自ら絶っていくという事実がでてまいりました。

そうしますと、命というのは傷つけられやすい。私たちの命というものは傷つけられやすいのです。また、私たちの方からいうと、傷つける側でもあるということです。傷つける命と傷つけられる命を持っているということです。その両面を私たちは持っています。そして本当に脆いのだと。短くて脆い。これも蓮如上人の「白骨の御文」で申しますと、「たれか百年の形体をたもつべきや」（真宗聖典・八四二頁）と。九月十六日を前にして厚生労働省の方から日本に百歳以上の方がどれ位おられますかということを言われた時に、五万人以上の方が現在日本の国の中におられるということでした。しかしそれは希なんです。毎日、新聞の訃報欄を見ますと、若い方々から様々な年齢の方が亡くなっている。本当に短くて脆い命を私たちは生きているのです。そしてその短い命、脆い命の中でそこにいろんな事を抱えているということがあります。

今年の八月十五日、お盆の折りなのですけれども、毎月十五日にお参りに行く家があります。なかなか十五日にお参りに行っても土曜、日曜と合わない日がありますので、そこの家族の方となかなか全員顔を合わすことができないのですね。八月十五日、お盆ということですから親戚の方もおられたし、家族の方もおられました。そして一緒に御内仏の前で正信偈のお勤めをし、御文をいただきました。その後、茶の間の方へ移って家族の方や親戚の方々と時間の許す範囲の中で色んな話をしておりましたら、平生はなかなか会うことのできない高校二年生の女の子

と少しお話をする時間をいただきました。四月から高校二年生になって八月、夏休みです。しかし彼女は、途中でどうしても学校に行けなくなってしまって、一学期の中程からずっと家の中におられたということです。

その高校生が今私はこういうことを思っていますということを書かれたものを見せていただきました。そこに高校二年生の女の子がこういう言葉を書かれていました。「この闇の中を方向も分からず迷い続けて、私はいつまで夢を追い求めていけるのでしょうか」と。高校二年生の少女の言葉です。何かそこに「みじかくもろし」の「もろし」の中にはそういうものを持っておるということですね。方向も分からず迷い続けている。そして、誕生して十七年間歩んできた歩みが闇やと言っているんです。青春の真っ只中で光り輝いている十七歳の少女は、今私にとってはこの現実の社会が闇なんですと、こう私たちに訴えました。その闇の中を方向も分からず迷い続けて、私はいつまで夢や希望を追い求めていったらいいのだろうかと。そこには不安というものがあります。生きることに対する悩み苦しみがやはりその言葉遣いの中にひしひしと感じられます。

境内の銀杏　撮影 野関哲也

またこれも昨年の三月十一日から一年と早七ヶ月が経っていますが、その東日本大震災、そして福島第一原発の一号機～四号機の放射能漏れの事故。そのことによって故郷を去って、現在金沢市で避難生活をされているご夫婦と知り合うことができました。そのご夫婦と知り合っていろんな話をしておりましたら、お父さんが亡くなったのが十三日だったそうです。その十三日にお参りに来ていただきませんかとご縁をいただき、毎月十三日にお参りに行っております。八月十三日、旧盆の始まる時に今借りているアパートの方にお参りに行きました。そしたら七十代を前にするご夫婦の方がこんなことを言われたのです。

毎年八月のお盆にお墓のほうへお参りしてきました。しかし、今の私たちは、自分の故郷である福島県浪江町の方にはお参りすることができませんと。放射能の汚染によって立入禁止地区だと。入ることができません。しかし、私たちもテレビや新聞でご覧になってご承知のように、二度だけ実家の方に帰ることができました。あの防護服を着て、マスクを着けて、ビニール袋を持って、限られた時間の中で二度だけ自分の家の状態を見に行くことができました。家の外壁は別にひび割れをしている状態でもないし、今にでもすぐに暮らせる状態です。中の家具であるとか冷蔵庫、そういうものは地震の影響で倒れているけれども、それを起こせばすぐに生活が出来るんです。ところが、目に見えない放射能によって今そこに入ることができませんと。

そして二回目の時に時間に余裕があったので、近くのお墓の方へ足を運びましたと。お墓の墓石はみんな倒れていた。そして倒れるだけでなくて、中に納められていた骨壷も全部割れて、目の前にはどのお墓も白骨が剥き出しの状態で私の目に入ってきましたと。

そういう状況を見られたら皆さんだったらどうされるでしょうか。行政の方々からは、絶対に土には触らないでくださいと言われていました。白骨を見ても、ただ二人で泣くしかありませんでしたと。

そうすると、今も様々なかたちで福島と宮城県、岩手県など東日本大震災からの復興が行われていると言われておりますけれども、避難されている一人ひとりの中にあるものは脆いのです。傷ついているんです。今もその白骨の上には目に見えない放射能が降り注いでいるわけです。

そのことを語った後にこういうことを言われました。私たち夫婦ももう七十を前にしております。あとどれ位生きられるのか分かりませんと。しかし、この金沢の今の住まいは仮住まいですと。もしここで主人が、私が息を引き取ったら誰が葬儀をだしてくれるのでしょうか。そして私たち二人のお骨は誰が面倒を見てくれるのでしょうか。お骨の居場所はどこなんでしょうかと。

そのお話を聞いた時、ドキッとさせられました。早く故郷の浪江町に帰れるといいなと思っていたのですが、逆にこれだけ脆い命を二人しながら生きているんだなと。いまだにそのことを背負いながら生きている。本当にこの親鸞聖人の言われた、人の命というのは短くて脆し、傷つけられやすいということです。まして現実問題として我が身が亡くなった後の白骨はどこに行くのだろうか。本当なら浪江町に納めたい。しかし、立入禁止地区、入ることもできない。じゃあ、お骨はどこへ行くのだろうか。私たちが何気なく思っていたお盆という節目なんですけども、その節目の中にあってもいまだに苦しんでいる方がおられます。

八十五歳の親鸞聖人が、今まで人の死に遇うてきた中で見えてきたものが「ひとのいのちみじかく、もろし」と。そういう言葉を親鸞聖人は、まず「命」という言葉の中で私たちにもう一度、自分の命とはどういうことなんだろうか。本当に短くて脆い命ですよと。その命の中で何を抱えているかと申しますと、悲しみというものを抱え、悩みを抱え、苦しみを抱え、そして不安を抱えている。実はこれが私たちの姿です。悲しみと悩みと苦しみと不安を抱えて生きている。それが高校二年生の方から、そして金沢市に一時避難されている方の声としてまさに聞こえてまいりました。

## 称名念仏

その聞こえてきた声を親鸞聖人は、称えると言われました。「となえる」という漢字が二つある中で法然上人、親鸞聖人、蓮如上人は称名念仏（しょうみょうねんぶつ）と言われた。親鸞聖人の「称」という字の受け取り方は「聞く人」なんです。人とは誰のことか。私です。私が聞くということなんです。「ねてもさめても、いのちのあらんかぎりは、称名念仏すべきものなり」というのは、日常生活の時間の中で「なんまんだぶ、なんまんだぶ」をただ唱えることではないわけですよ。自分が称えた一声の「なんまんだぶつ」という中に、聞くという中身を持っていますよということです。聞かなければならない内容があるということです。それを蓮如上人は「ねてもさめても、いのちのあらんかぎりは、称名念仏すべきものなり」と。ただ単に口に「なんまんだぶつ、なんまんだぶつ」を唱えるのではなくて、その称えた一声二声の中にも、聞くという大切な事柄を持っていますよということです。だから聞くことなんですよ。聞くという中身がありますよと。それを敢えて親鸞聖人は、この「称」という漢字の一文字の中におさえられたのではないでしょうか。

## 六つの字のこころ

親鸞聖人という方は非常に漢字というものを大切にされた方です。その漢字一文字の中に称名念仏の「称」という漢字は、それは聞くことなんですよと。ただ聞くのではなくて私が聞くということですね。では具体的に何を聞いていくのだろうか。そうしますと、やはり蓮如上人は御文の五帖目第十一通の「御正忌報恩講（ごしょうきほうおんこう）」という御文の中でこういうことを言われました。「それ人間に流布（るふ）してみなひとのこころえたるとおりは、なにの分別もなく、くちにただ称名ばかりをとなえたらば、極楽（ごくらく）に往生（おうじょう）すべきようにおもえり。それはおおきにおぼつかなき次第なり。他力の信心をとるというも、別のことにあらず。南無阿弥陀仏の六（む）つの字のこころをよく知りたるをもって、信心決定すとはいうなり」（真宗聖典・八三八頁）そこに「南無阿弥陀仏の六つの字のこころをよく知りたる」と。つまり称名念仏の「称」というのは南無阿弥陀仏の六つの字のこころを知るということです。それが要ですよということですね。南無阿弥陀仏の六つの字のこころを知りなさいと。

昨年も申し上げたかもしれませんが、物事にはすべて出発点があります。あるいは出処といわれるものがあります。今申しました南無阿弥陀仏という言葉も、実は突然その言葉や文字が出てきたわけではないわけですね。やはり出発点、出処があるからです。出発点も出処もないのに突然、南無阿弥陀仏という六つの字が出てきたわけではないわけです。そうすると出発点、出処とは一体どこなんだろうか。私たちは簡単に「なんまんだぶつ、なんまんだぶつ」と申しておりますけれども、申しておるところの出処とは一体どこなんでしょうかということです。やはり出処があるわけですね。

そうしますと仏法という教え、その教えというのは、最初は形もないし、姿もないし、色もないし、言葉にもなっていないし、あるいは文字にもなっていない。もともと色も形も姿も文字も言葉にもなっていないものです。しかし、その言葉になっていないものの中にどうしてもそのことを伝えたいという出処がある。その伝えたいものを受け取った方々が文字にし、言葉にして、現代の私たちのに伝えられています。それを敢えて言葉として表すならば何と言えるかというと、願いとしか言い表せない。

## 私の願い

私たちも同じように願いを持って毎日の日常生活を送っております。例えば、食事というひとつの場面を考えてみたいと思うのです。今現在は、男性の方も女性の方も一緒に食事を作ったりします。その食事ですけども、どちらの方が食事を作る回数が多いでしょうか。男性の方でしょうか、女性の方でしょうか。女性ですよね、やはり。やはりまだ女性の方が食事を作る場面があります。

その女性の方が食事を作るといった場合、夕食を作るとしても、ただ単に冷蔵庫を開けて必要なものを使って食事を作るというように思いがちですけども、実際に食事を作るというのは、大変なことだと思います。家族の食事を作るという時、そこにはまず、作る側は何を考えますかね。長い食事の経験の中で何を考えましたか。色々と考えたと思いますよ。まず、何を考えるかといいますと、ひとつは家族の健康状態、体調を考えたと思います。それから小学生、中学生、高校生という年齢に合わせて食事を考えていかなければならないし、ご高齢の方がおられれば、その方のことを思って食事を考えたのではないでしょうか。

我が家もそうなんです。我が家も食事を作るという時は、自分もたまに作るのですけれども、現在八十八歳、八十六歳の両親が居りますから、そのことをまず優先的に考えます。八十八歳、八十六歳ですからひとつ大きな問題を抱えております。健康ということです。ご飯を炊くにしても硬いご飯は両親は食べられないのです。それで、おかゆにするとまた食べないのです。そうすると、お米の水加減ですね。ここを工夫しなければならない。でも後に残る家族は両親の柔らかいご飯だと食べないのです。固めのご飯が好きなのです。だから、我が家には厄介なことに炊飯器が二台あります。両親用と家族用と。そうやって妻は、まずお米を研いでお米の準備をする。それからご飯は、硬いものが食べられませんが、野菜もそうなのです。やはり固めに茹でたものは食べられない。そういうふうに食事を作るにしても、健康、体調というものに気をつけます。そして、そのことを考えた上で包丁、まな板を使って料理をはじめます。それが具体的に夕食の時間に合わせて食卓に並びます。食卓に並んだ時に家族でそろったり、あるいは時間に違いはあるけれども食べられていきます。例えば、一生懸命に

工夫して手間ひまかけた料理を家族全員そろって食べる時、一番うれしい時はどんな時でしたか。一番料理を作ってうれしかった時、「おいしかった」と作ったものが残さず全部食べてくれた時。そうすると、その姿を見た時が一番うれしい。それは何かというと、家族の健康や体調を考えて作った料理を全部すべて食べてくれた。満足するということです。

## 仏の願い

そうすると、食事という例を出しましたけれども、食事を作るにしても家族のことを考えるわけですよ。実は、これは仏様も同じです。私たちはここで声に出した「なんまんだぶつ、なんまんだぶつ」というのは、何に触れることなのだろうか。六字の南無阿弥陀仏に触れることなのです。それでは、南無阿弥陀仏という姿を通した時、何に触れるのか。願いに触れるのです。誰の？仏の願いです。だから蓮如上人は南無阿弥陀仏の六つの字の謂（いわ）れを知りなさいと。ただ口に南無阿弥陀仏を称えているようだけれども実は、願いに触れるのです。声に出した南無阿弥陀仏は、具体的に声となって文字となった南無阿弥陀仏に触れると同時に、仏の願いに触れているということです。つまり、私たちが一声もうす念仏には、仏さんからの願いがかけられていますということです。私たち一人ひとりに。願いというものがかけられている。それが出発点、出処です。

## 私の出発点

ところが私たちは、この願いがかけられていることをすっかり忘れてしまっています。願いが自分にかけられているということに気づかないのです。その気づかない一番の大本（おおもと）がここにあります。出発点、出処です。私たちにも出発点、出処があるんですけれども、一番大切なことでありながら、これに全く気づいていません。それは何かと申しますと、ちょっと意地悪な質問をいたします。ちょっと準備してください。

ご自分が生まれた時の記憶をお持ちの方は手を挙げてください。手が挙がりませんね。これは皆さんだけではありません。私もなんです。もうひとつ。自分が赤ん坊であった時の記憶をお持ちの方は手を挙げてください。これもないです。今日、お子さんがおられますけれども、子どもが成長する時、赤ん坊の時の記憶をちゃんと持っておるんです。あるいは女性の方ですと赤ん坊を出産したという記憶は持っている。男性の私でも我が子がオギャーと生まれて、その産声を聞いたという記憶は持っている。

ところが肝心要の自分の出発点になると記憶がないのです。私が生まれたという記憶がないのです。しかしその記憶のない私たちですが、いつの間にか、私は人間ですと名乗っているのです。これ、不思議ではありませんかね。生まれたという記憶も持ち合わせず、赤ん坊であった時の記憶もとうに忘れて、そして自分は人間ですと名乗っています。

## 条件と無条件

その生まれた時、私たち一人ひとりはどういう状態だったのでしょうか。無条件です。何ひとつ自分ですることができず、ただ母親にしがみついて私を離さないでください、離さないでくださいとただしがみついていた。その私を二、三時間おきにオムツの中にウンチやオシッコをして泣き、そしておっぱいを飲んで、また二、三時間寝たらまた泣いて起きて、その繰り返し繰り返しの中、誰一人こんな子育ては嫌や、夜中に起きるのも辛いし、早朝に起きるのも辛いと言って、次に泣くまで一時間位オムツを替えないでおこう、おっぱいを与えないでおこう、誰もそんなことをしていないわけですよ。全部先に生まれた両親も祖父母も、そして兄弟姉妹たちも私を無条件で受け入れてくれたのですよ。これが私です。これが出発点です。

ところが今はどんな常態か。無条件であった者が条件を付ける側に変わりました。一番身近なところでいうならば家族に対して。受験生がおれば受験生というところの中で条件を付けます。もう少し勉強せな駄目やぞという条件を付けます。なんで勉強せんなんかと聞かれたらそれはどこそこの高校に入るためや。高校

に入って次どうするんや。どこそこの大学に入るためや。じゃあ、その大学を出たらどうするんや。どこそこの会社に就職するためや。就職したらどうなるんや。月給というサラリーが入ってくるやないか。この厳しい時代状況の中で、そんないつまでも定職に就かないというわけにはいかないやろう。みんな家族であっても条件を付けます。

また家族以外でも私たちは条件を付けます。例えば、老人会で秋のバス旅行という時にこんな条件を付けるんです。バスの座席をどこに座るか。ちゃんと私たちは考えます。集合場所に集まった人の顔を見て何をするか。この人は私好きやけど、この人は苦手や。この人は嫌いなんや。じゃあバスに乗る時、誰と座りますか。一番仲の良い好きな人と座って、嫌いな人の横には絶対に行きません。みんな条件を付けるんです。条件を付けて私たちは今日まで育ってきた。でも最初は無条件だったのです。その無条件であったことを私たちはもう忘れています。

南無阿弥陀仏を称えるということは、南無阿弥陀仏に触れることであり、願いに触れることです。それは何か。自分の出発点に戻るということです。無条件であった自分というものにもう一度帰ってみるということです。条件も付けずにこの私を引き受けてくれた人と出遇うということです。そのことをもう私たちは忘れております。つまり、私たちが忘れていたそういうことを呼び起こしてくれる声が南無阿弥陀仏なんですよ。南無阿弥陀仏とは、忘れ果てていたけれども、私の中にきちんと残っている、その大切なことを呼び起こしてくれる声。なんまんだぶつとは、自分の中に忘れ果てていた大切な事柄を呼び起こす声に自分が出遇うていく、それがまさに称名念仏なんです。お念仏とは、そういう念仏なんです。

そのお念仏を親鸞聖人は、ただの念仏ではなくて何と押さえたか。智慧の念仏だと。仏の智慧によって忘れ果てていた自分というものを呼び起こしてくれる。その呼び起こさんとする願いに目覚める、それが称名念仏。南無阿弥陀仏と称えたということは、南無阿弥陀仏に触れて、そして思いにもよらなかった願いに触れるということです。もう忘れ果てていた願いというものに自分がもう一度目覚めていく。それがまさに親鸞聖人のいう、蓮如上人のいう「称名念仏すべきものなり」という目覚めです。なんまんだぶつの一声の中に願いに触れていかなければならない。その願いに触れる中で、一番の大本はこの私だったと。私の出処にもう一度私を聞いてください。それを先輩方は仏法聴聞という言葉を通して私たちに呼びかけてくださっている。

この本堂に来てみた時に、はじめて日ごろのこころでは気づかなかった声がようやく、はじめて聞こえてまいりました。その声によって自分が響きだされた自分と出遇うていく。それがこの本堂に集うということです。それを仏法聴聞という言葉の中で真宗の先輩方は、仏法は聴聞に限りますと。仏法は聴聞ですよという言葉で伝えてくれているのではないかと思います。雨の中、お参りいただきましてありがとうございました。

◇平成二十四年十月十七日、浄光寺報恩講の法話録でございます。まことに勝手ながら当方において抜粋、編集させていただいたものであることをお断りいたします。

◇周知のように、安楽寺に蔵されている温泉津町の才市（1850~1932）肖像画には角がある。すごい絵ですわ！びっくりしますね～。われら記念写真となると少しでも綺麗に、かっこよく写してもらおうと精一杯のポーズをとるんですよね！われこそはの顔の多いこと！鈴木大拙師らのお力によって、「WONDERFUL GOOD MAN」と世界に紹介された真宗の篤信家の一人が自らたのんで画かせたものなんですよ！

良源（913~985）さんとはえらい違いますな！鬼と化しておられるが、疫病払の護符として京人を見守ってる。この方のお弟子さんに源信さんがおられます。角を持つ鬼の捉え方がこうも違うものなのかと驚かされる。くしくも良源没年時に弟子源信が『往生要集』を脱稿し、後の念仏信仰に決定的な方向を与える事となるのである。

源信さまの「妄念はもとより凡夫の地体なり　妄念の外に別の心もなきなり」との仰せのお導きは時を超え、われら凡愚に一筋の光を与え続ける。ただ千年の時が流れているのではない。数限りなき名もなき念仏者の葛藤が凡夫をして耕し続けた結果なのである。（受）

○年中行事

| | | |
|---|---|---|
| 除夜の鐘 | 十二月三十一日 | 午後十一時半 |
| 修正会 | 一月一日 | 午前0時 |
| お太子さん | 三月二十日 | 午後一時 |
| 盂蘭盆会 | 七月十三日～ | 午前六時～ |
| 追弔会 | 八月十三日 | 午前十時 |
| 報恩講 | 十月十七日 十八日 | 午後一時半・夜七時 午前十時半 |